

# 神戸の施設 読売療育賞

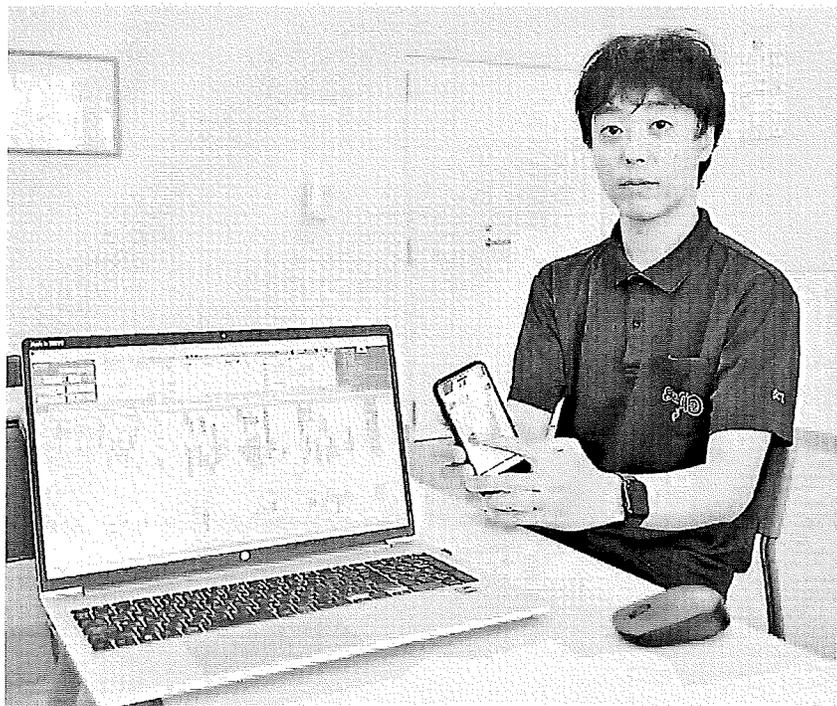
## 短期入所にウェブ

### 利用者とは職員 利便性向上

重症心身障害者施設で働く職員の優れた実践研究に贈られる「第19回読売療育賞」（読売光と愛の事業団主催）に、神戸市北区の「神戸医療福祉センター」に「こころハウス」が選ばれた。短期入所サービスの利用申し込みなどにウェブシステムを導入した研究で、社会福祉士の名越寛樹さん（41）は「利用者とは職員の利便性向上に貢献できた」と喜ぶ。

（新谷諒真）

2001年に開所し、医療・介護事業所を運営するほろろ型障害児入所施設と療養



ウェブシステムによる短期入所サービスの利用申し込みについて説明する名越さん（神戸市北区で）

援・放課後等デイサービス、生活介護事業など、障害のある人らを幅広く支援する。これまでは、短期入所希望者からの申し込みを、ファクスや窓口、郵送で受け付け、経験豊富な一部の職員が手作業で対応していた。だが、慢性的な人手不足に加え、新型コロナウイルス感染症への対応もあり、作業が遅れがちになっていたという。

そこで22年4月、作業効率化と、職員の誰もが作業にあたるようにするため、ウェブシステムの導入を決断。現場を知る職員らがコンサルタント会社の技術協力も得ながら、約1年かけて開発した。

利用者がスマートフォン

で申し込みや変更、体調の連絡などを行い、施設側はその内容をスケジュール調整や関係部署への連絡などに連携できるというもの。スマホを持っていない利用者については、職員が代行入力できるようにした。

システムを導入したことで、急な変更にも素早い対応が可能になるなど、利用者の利便性は向上。「管理が楽になった」「申し込みのハードルが下がった」といった利用者の声も届く。施設側も膨大な情報の処理が正確かつ迅速に行えるようになり、調整に費やす時間が約95%削減され、利用者の相談援助などの業務にあたる時間を確保できるようになったという。

作業の効率化を図りたい福祉施設は多く、他法人からシステム導入についての相談も寄せられる。名越さんは「将来的に、神戸市内など地域一体となったシステムを構築できればいい。職員の負担を減らしつつ、一人でも多くの人が効率良く短期入所できるようにしたい」と展望を語った。